

No.38

# 明日への 扉

## 納得の一枚を求めて

いっ しん にゅう こん  
一針入魂

みず ぐち しん じ  
水口 真司 さん



「機械を相手にするより、手仕事のほうが楽しい」と話す水口さん。家業の畳製作では、機械を用いて作業を行う部分も多いが、ポイントとなる細かな仕上げ作業などでは、自らの手で、畳師としての技術を惜しみなく注ぎ込む。

昭和48年鹿屋市生まれ。鹿屋工業高校卒業後、家業の畳店で畳師の道を歩み始め、国家資格の一級技能士（畳製作技能士）を取得。熟練技能者が技能日本一を競う技能グランプリに、県代表として平成27年・29年の2回連続出場。現在は有限会社水口畳産業の4代目。（44歳）

曾祖父の代から畳店を営んでいて、畳を作る光景は、日常生活の一部でした。中学生のころには手伝いをしていて、高校卒業後家業に従事することも、自然な流れでした。

上司でもあり師匠でもある祖父や父は、根っからの職人気質。最初のころは、仕事を教えてもらう中でけんかをすることもありましたが、家族だからこそ本気でぶつかり合えるし、その中で多くの技術や考え方を得ました。それが、畳師としての私の基礎になりました。

技能グランプリに参加したきっかけは、県の畳工業組合スタッフの勧めです。グランプリは、学校などで専門的に学んだ、全国の優秀な技能士などが集まる大会。たたき上げの私はこれを「自分をより向上させる絶好の機会」と考え、県の選考を経てグランプリに臨みました。

グランプリは、「支給される材料で、所定の時間内に所定の課題作品を作り、その結果を審査する」方法で行われます。ですが材料の状態が微妙に違います。このため、同じ作り方でも仕上がりが異なったりします。また時間内に完成させないと審査対象にならないので、極限の重圧にさらされます。数時間集中して課題を終わらせると、心身ともにぐったりして、「次はもう出なくても」と思うこともあります。

それでも私がグランプリに出るのは、「全国の畳師に出会い、技術を学ぶことで、畳師としての自分を高められる」からです。元々、コンテストなどに出たい、あるいは賞を取りたいといったことは、あまり考えていませんでした。ですが、グランプリに正面から向き合うことで得た多くの知見が、私を成長させました。

四半世紀以上の経験で感じる畳の魅力は、感触や匂いなどを直接感じられること。直接畳を踏みしめ、あるいは寝転がって、い草の匂いが鼻をくすぐると、安らぎを感じるのは、日本人ならではの楽しみです。

今までに何枚畳を作ったか分かりませんが、「これだ」という納得の一枚にはまだたどりついていません。畳師としての私はまだまだ未熟です。私にとってはグランプリなども練習の場。練習・経験・挑戦など、すべては「畳師としての自分を高め、納得の一枚を仕上げる」ためです。

家業では「畳屋さん」として、畳の製作・配達・設置など、全部自分たちで行います。その合間で「畳師」として修練する。「畳屋さん」と畳師の両立は困難な部分もあります。ですが、「畳屋さん」として、子どもに5代目を継いでほしい、「畳師」として、納得の一枚を仕上げる、2つの目標に向かって、これからも畳と真摯に向き合っていきたいです。